

## 創刊特別寄稿

## 専修心理の一員として想うこと

船越知行



現職：目白大学人間学部人間福祉学科 教授・学科長  
 1968年 文学部人文学科入学，1972年 同卒業  
 出身ゼミ：重松毅先生

このたび、母校の学部改組に伴い専修大学人間科学部心理学科が新たな組織として再編されたことに同窓の一員として、心よりお喜び申し上げます。過日、実施されたホームカミングデイに参加し、真新しい施設と設備の充実ぶりに驚くとともに、何よりも幅広い教授陣を擁した研究ブースを拝見でき母校の教育水準の高さに感銘を受けました。はからずも専修人間科学論集心理学編創刊号への寄稿の機会をいただいたことにあらためて感謝申し上げますと共に、専修大に心理が誕生して44年、その歴史に想いを馳せつつ一言想いを述べさせていただきます。

## —黎明期の心理学コース—

私の学んだ時代（1968年入学—LH43）は、開設3年目の文学部人文学科心理学コースという名称でした。当時の学生にとって、心理学を学び心理学を活かした職業に就くことは、ある意味で“未来の仕事”を感じさせるものでした。大学の講義は有益な知的経験でした。当時の重松毅先生や金城辰夫先生は40歳代、河内十郎先生と中谷和夫先生は30歳代という何方もやる気に満ちた教授陣でした。ことに河内十郎先生と中谷和夫先生の講義は印象深く、私のような不勉強な学生には、かなり難解でしたが、何か引き付けられる魅力がありました。当時の学生は、今風の学生のように“分かるように講義して欲しい”などとクレームを言う者は皆無だったと思います。逆に、先生方からは心理学への興味を拓けていただいているという思いがありました。40年近く経ったいまも記憶に残るのは、河内先生の授業です。A. N. チョムスキーの生成文法に関して膨大な英語の参考文献を板書される凄さに圧倒され誠に刺激的な経験でした。私が大学に入学した頃は、心理学研究室も小規模で、現在の脳波実験準備室が先生方のたまり場の様でした。重松先生と金城先生の名コンビで和気あいあいとした雰囲気があったと記憶しています。

## —専修心理への期待—

私のような世代からしますと専修心理の強みは、やはり基礎心理学にあると思います。すでに開設当初から脳波室や知覚実験機材など実験系の学びの環境が整っていました。今日の心理学科は、そういった歴史の上に応用心理学が充実しバランスのとれた総合的な心理学科になったと思います。近頃の臨床心理士のなかに、基礎を十分理解しないまま職に就いている方を見受けます。その点、専修の心理学科は、臨床心理を志望する学部生や院生にとって、学部で心理学の基礎と隣接科学の学びができ、その後の大学院修士2年での本格的な臨床教育を加えた6年間の教育環境が整っていますので心配ないと思います。

特に子どもの発達に係る領域については、大学院博士3年での高度な心理の人材育成をお願いしたいところです。

－後輩とのつながり－

私は、1972年に学部を卒業した後に横浜市教育センターで嘱託の子ども相談員をしながら青山学院大学の修士課程心理学専攻に進みました。そして東京都台東区に公務員心理職として奉職しました。2005年にご縁があって目白大学人間学部人間福祉学科に移りました。大学では、障害児臨床の立場から発達支援システムの研究をしています。福祉と心理の境界領域を通じて障害児を含めた子どもの支援を捉え直すことを課題としています。現在、専修大の大学院を修了した7名の臨床心理士の後輩たちと都内の自治体で発達に躓きのある子どものケアに携わる従事者の支援に的を絞ってコンサルテーションの研究を進めています。

－同窓のネットワーク－

卒業生の一人として、学部生のキャリア形成と進路の問題が気にかかります。新生なった心理学科には、公的部門の仕事に就くための進路支援を積極的に促していただきたいと思います。専大生の公務員志向は高く、既に都道府県や市区町村など公的部門に卒業生が多くいます。先輩と後輩とを結びつける同窓組織があることは後輩に仕事の道を開くことになります。新しい心理学科のラボ案内図を拝見しますと「同期会広場」という名の交流スペースが作られているようです。例えば心理学科のWeb上に“同窓会広場”という窓を設けて、在校生と卒業生を繋げる新たな交流の場づくりをすることも一案です。

専修心理の創設50年の頃には、全国の同窓生が心理学科の交流網を通じて母校に貢献する同窓のネットワークが稼働していることを願っています。